

あいち農産物生産流通レポート

2025年11月号

ページ

◎ マンスリーレポート

- ・ 令和7年度あいち食育いきいきシンポジウム
「～広げよう食育活動！活かそうSNS～」を開催しました (食育消費流通課) 1

◎ 地域トピックス

- ・ 知多地域食育推進ボランティア研修交流会を開催しました (知多農林水産事務所) 2

◎ 東京レポート

- ・ 最先端のスマート農業が分かる展示会について (東京事務所) 3
- ・ 「GREEN×EXPO2027」開催まであと500日 (東京事務所) 4
- ・ 観賞用植物のトレンド (東京事務所) 5

- ◎ 東京都中央卸売市場における11月の主要な愛知産青果物の動向 (東京事務所) 6

◎ 花 き

- ・ 切花・鉢花の11月の見通し(県内市場) (食育消費流通課) 8

内容についての問合せ先

愛知県農業水産局農政部食育消費流通課 (052)-954-6434

愛知県東京事務所行政課農産物プロモーショングループ (03)-5492-5400

令和7年度あいち食育いきいきシンポジウム 「～広げよう食育活動！活かそう SNS～」を開催しました

食育消費流通課

2025年10月20日（月）に名古屋市中小企業振興会館において、第4次愛知県食育推進計画である「あいち食育いきいきプラン2025」の取組の一環として、食育活動の情報を広く発信する手法を学ぶことを目的に、シンポジウムを開催しました。

当日は、食育に関心の高い県民、各種団体・企業関係者、行政職員等47名が参加しました。

1 講演「食育をもっと届けよう！ やさしい SNS 活用入門」

一般社団法人 SNS エキスパート協会代表理事の後藤真理恵氏からは、SNS による情報発信に関する豊富な経験から得られた SNS の活用方法などについて、お話いただきました。

SNS の活用にあたっては、「誰にどうしてほしいのか」を決めてから、目的に合った SNS を選んだ上で始めることの大切さについて、データを交えてご紹介いただきました。

また、SNS に情報を投稿する際には、ファンとの関係性を深める5つの要素「役に立つ、参加型である、親近感がある、共感できる、タイムリーである」のうち、少なくとも1つ盛り込んで発信するなど、具体的な話を聞かせていただき、参加された方々に、参考となったようでした。

2 取組事例1「ショート動画で広げる消費の輪」

JA ひまわり営農部青果課係長の佐藤光氏からは、「365日大葉を食べる人」という SNS アカウントで運用している取組をご紹介いただきました。

取組を始めた頃は、再生員数が伸びず、反響も少ない状況でしたが、演出を工夫し、明るく・テンポよく、季節の食材を組み合わせたレシピにするなど、視聴者を意識した投稿を続けた結果、再生回数が伸び、フォロワーも増加していったという実体験を通じた話を聞かせていただきました。

3 取組事例2「管理栄養士が実践する“伝わる発信”－SNS で広げる食育の可能性」

Clair(クレール)管理栄養士の鈴木ひかり氏からは、料理教室等の食に関する活動情報を SNS で発信している取組事例について、ご紹介いただきました。

SNS の投稿を継続するには、「投稿頻度を決める」、「自分のイメージを決める」などのヒントが示され、その上で、「まずはやってみる」、「コツコツ続けることで食に興味を持つきっかけづくりになる」との話があり、実践に向けた心得を学ぶことができたようでした。

その後のトークセッションと質疑応答では、講師と事例発表者との間で活発にやりとりが行われるとともに、参加者からの質問にも丁寧にお答えいただくなど、有意義な時間となりました。

参加者からは、「食育活動の普及につなげていけるようにチャレンジしてみたいと思った。」「食育の発信のポイントを教えていただき、今後につなげていきたいと思う」などの声が寄せられ、SNS の活用に対する意欲が高まったようでした。

このシンポジウムをきっかけに、食育活動の一層の充実が図られることを期待します。



知多地域食育推進ボランティア研修交流会を開催しました

知多農林水産事務所

愛知県では、地域で食育活動を自主的に行っていただく方を「食育推進ボランティア」として登録し、活動を支援しています。

2025年10月23日(木)に、JAあいち知多アグリカレッジあすなろ舎で、『令和7年度知多地域食育推進ボランティア研修交流会』を開催し、食育推進ボランティア等32名が参加しました。

1 講演

大府市内の有機農業者らで組織する『おおぶニックのWA』の代表であり、市内で自然栽培を行っている杉山修一氏より、「農から考える環境と持続可能性～人とつながる、未来へつむぐ～」と題し御講演いただきました。

有機農業や自然栽培、農業生産活動に伴う環境への影響等について学びました。農業が環境に負荷を与えていることを初めて知った参加者も多く、驚きの声もありました。

また、購入時に農産物等を選ぶ力を身につけるため、食品表示の基本と有機農産物・特別栽培農産物の見分け方、見えるラベル等についても勉強しました。



説明する杉山氏

2 事例紹介

第9回食育活動表彰で消費・安全局長賞を受賞した「知多市健康づくり食生活改善協議会（通称「食改さん」）」の衣川会長から、調理実習、「食改さんのおすすめレシピ」を知多市ホームページ等に掲載、産業まつりへの出展などの活動について事例を御紹介いただきました。



説明する衣川氏

3 地産地消について

『げんきの郷』の新美社長が、日本最大規模を誇るJA産直施設『げんきの郷』について、県は『いいともあいち運動』について、JAあいち知多は、知多半島の農畜産物ブランド『知多どれ』について説明していただきました。



最先端のスマート農業が分かる展示会について

東京事務所行政課農産物プロモーショングループ

2025年10月1日(水)から3日(金)にかけて、千葉県の幕張メッセで農業・畜産総合展「第15回農業 WEEK」(主催:RX Japan 株式会社)が開催されましたので、その一部を紹介いたします。

1 農業 WEEK の様子

農業法人、生産者、JA、農業参入を検討する企業などが来場する日本最大級の農業・畜産分野の総合展示会です。会場は「国際スマート農業 EXPO」、「国際農業資材 EXPO」、「次世代農業経営 EXPO」、「国際畜産資材 EXPO」、「農業 脱炭素・SDGs EXPO」の5エリアに分けられ、多岐にわたる分野の企業・団体が351の出展ブースを設けていました。

2 イノベーションが進む最新のスマート農業

特に会場で注目を浴びていたのは、農林水産省の中小企業イノベーション創出推進事業で開発・実証事業を行うスタートアップが集結した展示ブースでした。

展示のあった13社のうち本県企業は5社で、内容は下表のとおりでした。



スタートアップの展示ブース

企業名	展示内容
グランドグリーン(株) ※名古屋大学発の企業	独自に改良を加えたゲノム編集技術の活用による気候変動対策に資する作物品種の迅速な開発・実証
TOWING(株) ※名古屋大学発の企業	高機能バイオ炭の大規模製造プロセスの開発及び大規模農地実証
(株)豊橋バイオマスソリューションズ ※豊橋技術科学大学発の企業	温室効果ガス排出量削減に資する循環型社会システムの開発・実証(メタン発酵～液肥製造・濃縮の一体化システムの開発)
(株)トクイテン	みどりの食料システム戦略の実現に寄与する大規模有機スマート農場のモデル確立
ListenField(株) ※コンソーシアム代表企業	リモートセンシング・AI・ゲノム情報の活用による次世代育種サービスの開発(スタートアップ3社によるコンソーシアム事業)

また、北海道大学大学院農学研究院の野口教授の講演では、スマート農業技術の最新動向と展望について紹介されました。

講演の中で特に印象に残ったのは、ドローンの撮影画像を用いてデジタルツイン※により仮想農場を構築し、その中で様々な圃場環境に合わせたロボットトラクタの作業計画を作成する取り組みです。これにより、実際にトラクタを走らせてデータを取得しなくても、最適な作業計画を作成することが可能となり、省力化・効率化が図られます。

〔※現実世界の環境から収集したデータを用いてデジタル空間で同じ環境をあたかも双子のように再現し、モニタリングやシミュレーションを可能にする仕組み。〕

超省力化や精密化、高品質生産を実現するスマート農業は年々進化を遂げており、このような技術の導入が本県農業の未来像を大きく塗り替えることを期待しています。

「GREEN×EXP02027」開催まであと 500 日

東京事務所行政課農産物プロモーショングループ

2027 年に神奈川県横浜市で開催される 2027 年国際園芸博覧会「GREEN×EXP02027」（主催：公益社団法人 2027 年国際園芸博覧会協会）の開催まで、2025 年 11 月 4 日であと 500 日になります。これを記念して、東京、横浜では自然と触れ合うウォーキングイベントや、親子や小中学生向けに園芸文化と触れあうイベントが予定されています。これまでも東京、横浜では開催に向けた様々な機運醸成の取組が行われており、その一部を紹介します。

1 「GREEN×EXP02027」の概要

GREEN×EXP02027 は、2027 年 3 月 19 日（金）から 9 月 26 日（日）までの 192 日間開催される、国内最上位の園芸博覧会です。同クラスの園芸博覧会は、1990 年に大阪で開催された「国際花と緑の博覧会」以来、37 年ぶりの開催となります。前回の「国際花と緑の博覧会」では、東南アジア原産の植物である「クルクマ」が初めて日本で紹介され、本県では 1993 年から、碧南市で生産が始まりました。

GREEN×EXP02027 は、国際的な園芸文化の普及や花と緑のあふれる暮らし、地域・経済の創造や社会的な課題解決への貢献を目的に開催されます。会場は、横浜市の旧上瀬谷通信施設地区の敷地で、約 100 ha に 70 の国・国際機関が出展を予定しており、来場者数は 1,000 万人以上を見込みます。

本県においても「横浜国際園芸博覧会出展あいち実行委員会」を設立し、出展の準備を進めています。

2 開催に向けた機運醸成の取り組み

2025 年 5 月 3 日（土）～5 日（月）にパシフィコ横浜で開催された日本最大級の園芸イベント「横浜フラワー&ガーデンフェスティバル 2025（2025 年 6 月号で紹介）」では、会場内に「GREEN×EXP02027」PR ブースが設けられ、公式グッズの販売や、公式マスコットのフォトスポットが設けられました。ステージでは「GREEN×EXP02027」特別仕様のナンバープレートに関する共同記者発表会が開かれました。



公式グッズの販売ストア



公式マスコット
「トゥンクトゥンク」



特別仕様のナンバープレート
記者発表会の様子

また、「GREEN×EXP02027」を盛り上げる取組として、応援の輪を可視化するリング（腕輪）「ブルーミングリング」を制作し、横浜市内を中心に横浜開港祭や横浜七夕祭りなどの各種イベントで配布を行っています。

「GREEN×EXP02027」を契機として、花と緑のある暮らしに注目が集まり、本県花きの消費や生産がより活発になることが期待されます。



ブルーミングリング

観賞用植物のトレンド

東京事務所行政課農産物プロモーショングループ

2025年10月1日（水）から3日（金）にかけて、幕張メッセで「国際ガーデン&アウトドア EXPO」（主催：RX Japan 株式会社）が開催されました。

花、植物を展示するブースを取材しましたので、その概要を紹介します。

1 暑さに強いPW品種

企画展示「暑さ寒さに負けない！進化する世界の種苗展」では、PW※¹（PROVEN WINNERS）の暑さ、寒さに強い商品を展示していました。夏越し対策の必要度合を「耐暑性レベル※²」として5段階に分け、全てのPW商品に表示しており、耐暑性レベルが最も高い★5つでは、「ほぼお手入れなしできれいに夏越し可能」と説明がありました。

昨今、夏の猛暑や高温多湿により屋外で観賞用植物を管理するのが難しくなっています。耐暑性レベルを表示することで、鉢の置き場所や、遮光や剪定などの手入れが必要かどうか等、購入後の取扱い方法を消費者に分かりやすく伝えています。

※1 PW（PROVEN WINNERS）は世界20社の種苗会社が参加する植物の国際ブランド。「世界中の育種家が生み出す、優れた園芸品種を紹介すること」をコンセプトに、世界中の育種家から集めた園芸品種を、厳しい試験を繰り返して選抜し、品種化している。日本の企業では株式会社ハクサン（愛知県日進市）1社のみが参加。

※2 耐暑性レベルは最高気温、夜温、西日、湿度等の影響要因を考慮して設定。



耐暑性レベルごとに商品を掲示



耐暑性レベル★4のPW品種
「スーパーペチュニア」

2 「ローメンテナンス」な植物、園芸資材

植物を展示するブースでは、最小限の手入れで美しさを保つ「ローメンテナンス」を意識した植栽用の植物が目立ちました。ローメンテナンスな植物には生長が遅いコニファーや、暑くても花が咲くノリウツギなどがありました。また、園芸資材を扱うブースでは、長期間水やりを必要としない底面給水鉢が多く展示してありました。

観賞用植物のトレンドは、暑さ、寒さに強い品種であること、ローメンテナンス（最小限の手入れで美しさを保つ）であると感じました。これらにより、花や植物のある暮らしを始めるきっかけになることが期待されます。

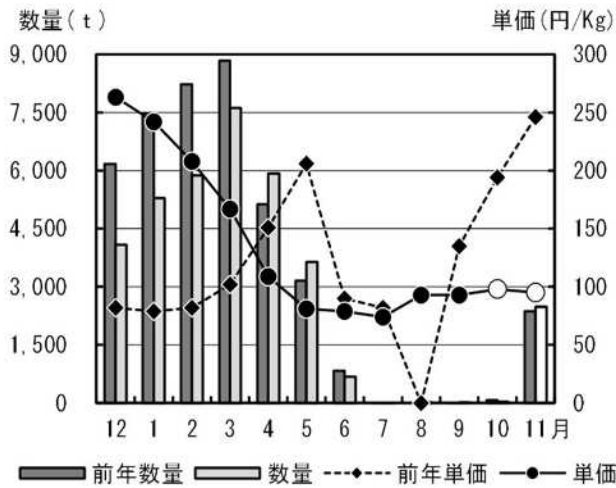
東京都中央卸売市場における 11月の主要な愛知産青果物の動向

11月の見通し

品目名 キャベツ

区分 実績等		入荷量 (t)	卸売価格 (円/kg)	前年上位3産地(%)		市場からの提言等
実 績	2020年	15, 067	62	千葉	33%	愛知産を望む量販店や加工業務は多いので、信頼を高めていく取組が必要である。そのためには、安定した出荷量の維持に加えて、店頭売価や加工単価を熟慮した相場や契約単価を産地と市場が一体となって検討していく必要性がある。
	2021年	15, 458	68	茨城	26%	
	2022年	14, 227	81	愛知	20%	
	2023年	13, 489	104			
	2024年	11, 572	207			
	5 ヲ年平均		13, 963	104		
2025年見通し		13, 500	80			

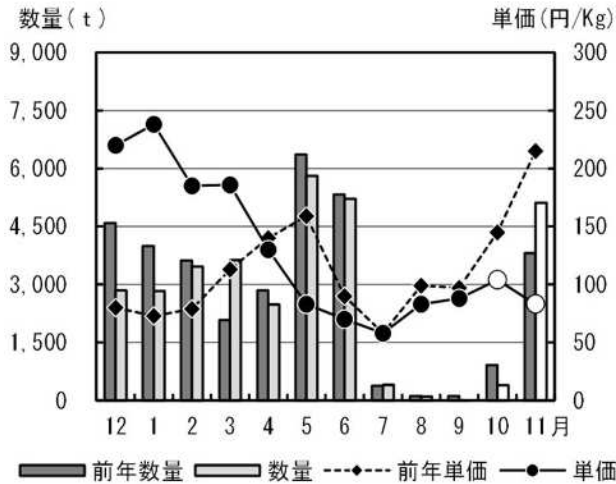
愛知産の動き



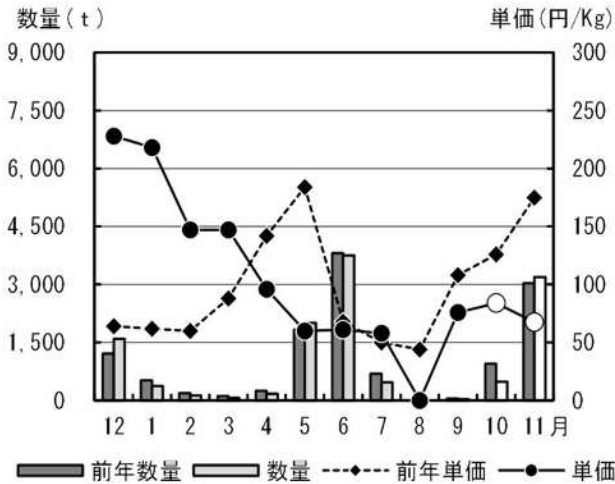
産地概況

夏場の高温と干ばつの影響により、各産地とも定植遅れがみられた。
 本県は、高温の影響を受けたものの、生育は順調に推移しており、安定した入荷が見込まれる。
 競合産地については、千葉は、9月定植分が主体となり、11月中旬頃から潤沢な入荷量となる見込み。
 茨城は、生育が平年よりもやや遅れ気味で、11月以降に安定した入荷となる見込み。

競合産地の動き（千葉）



競合産地の動き（茨城）



2 入荷量・価格の動き

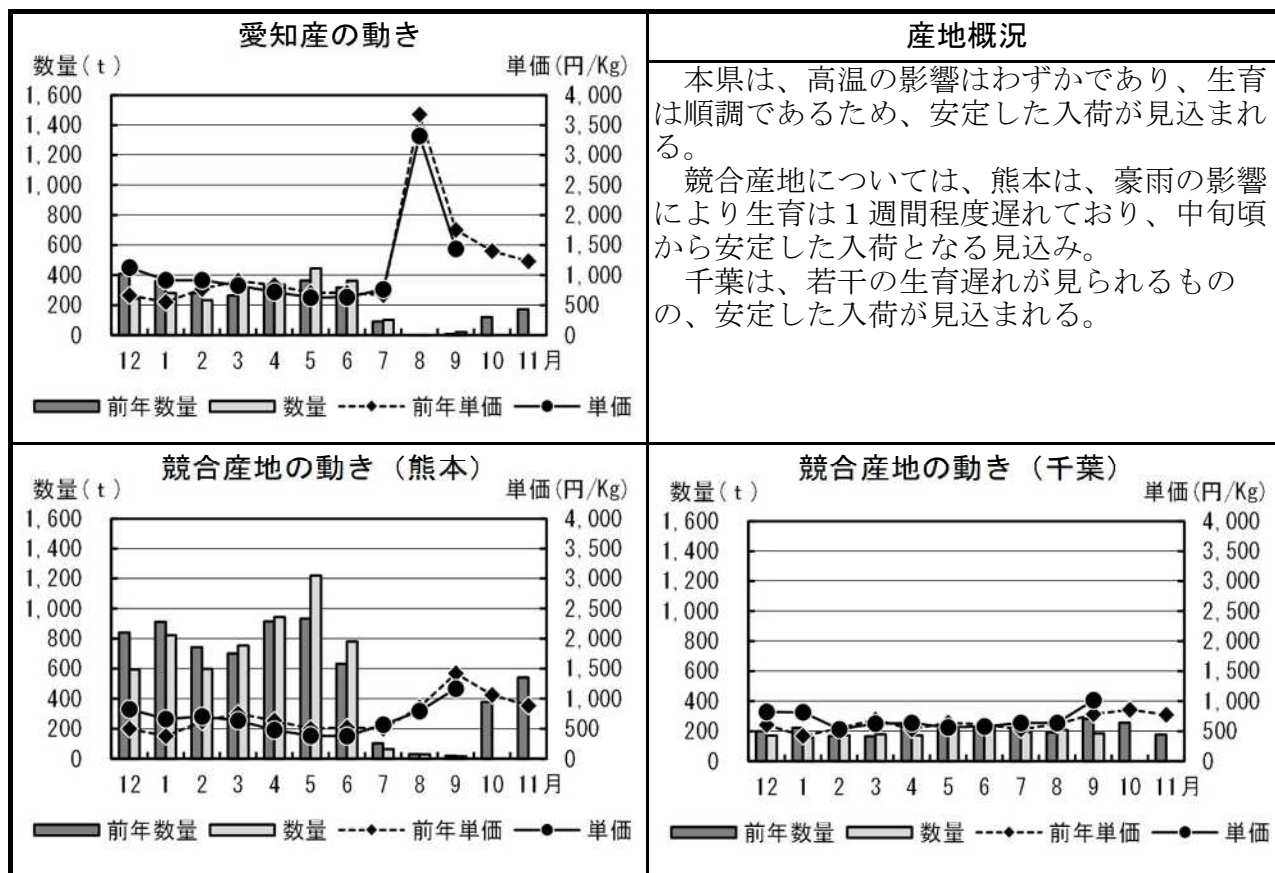
品目名 ミニトマト

前年上位3産地 (%)

熊本 42%

千葉 14%

愛知 13%



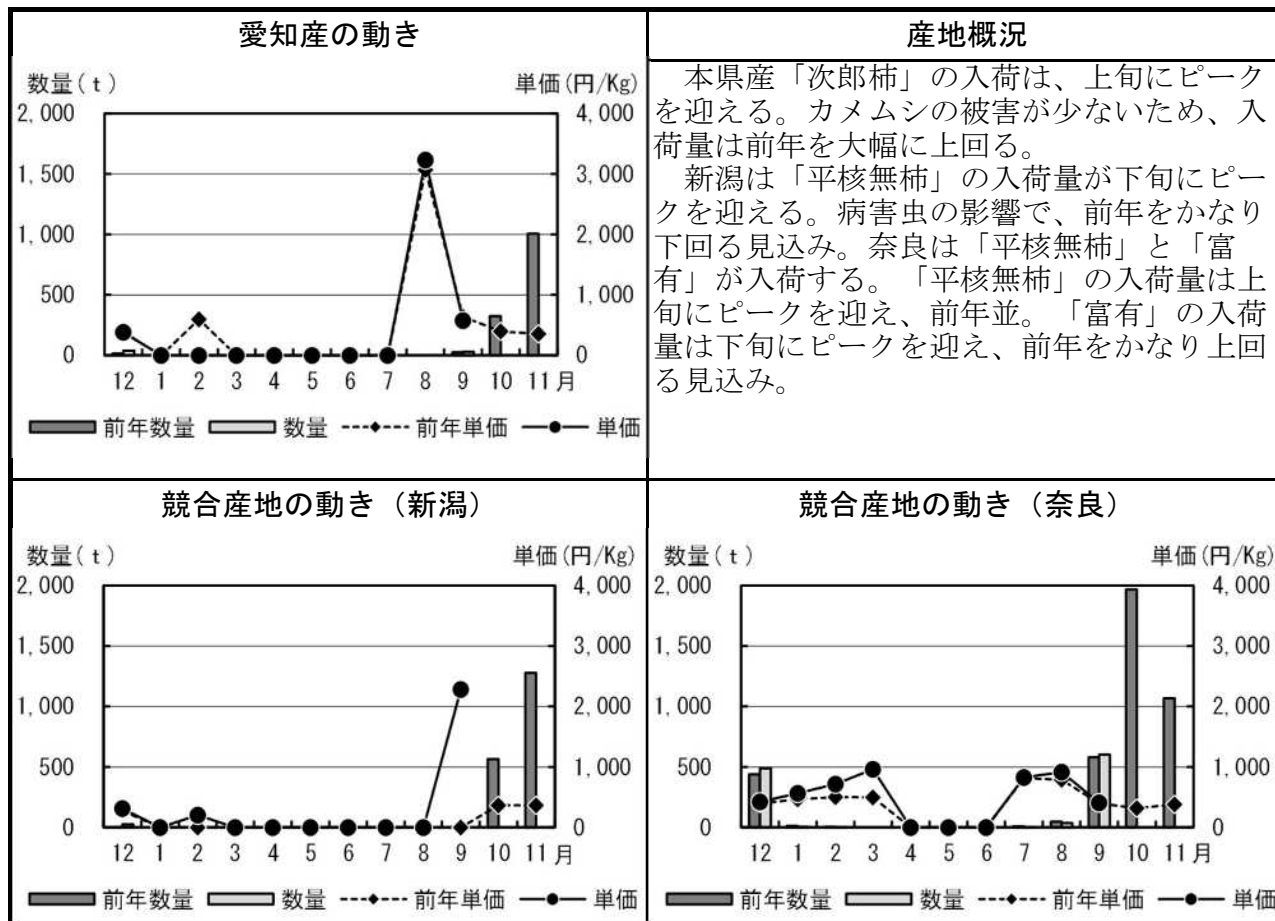
品目名 かき

前年上位3産地 (%)

新潟 21%

奈良 18%

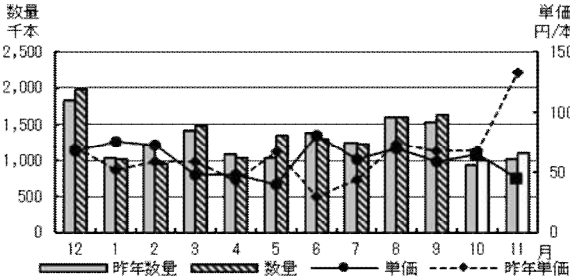
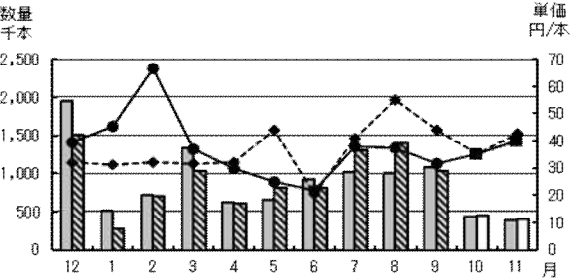
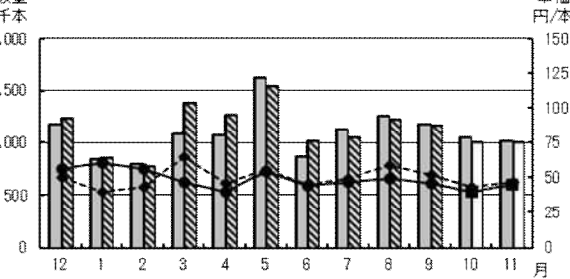
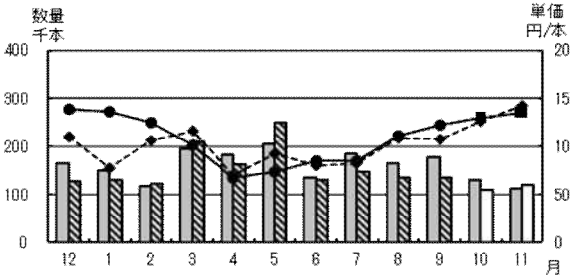
愛知 17%



切花・鉢花の11月の見通し

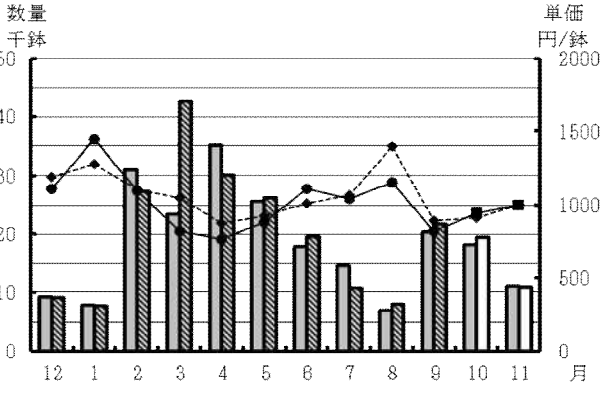
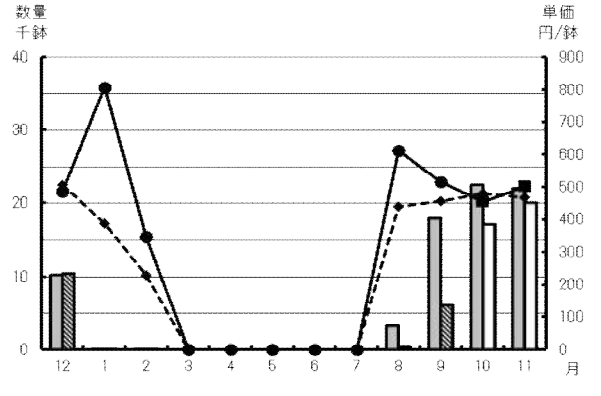
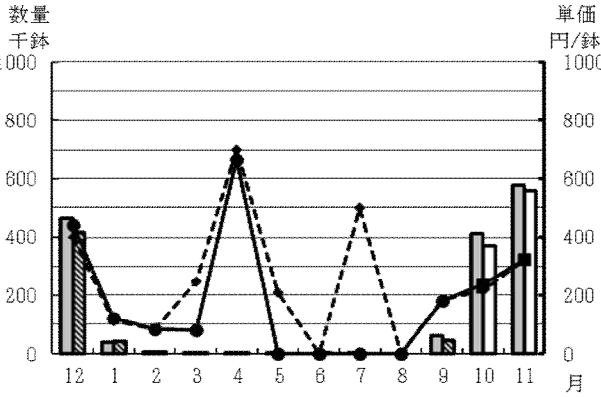
切花（愛知名港花き地方卸売市場 11月6日現在）

単位：千本、円／本

品目	区分		入荷量	卸売価格	前年及び本年の入荷量・価格の動き
	実績等				
輪 ぎ く	実績	2020年	1, 1 9 1	5 2	
		2021年	1, 4 4 1	5 4	
		2022年	1, 3 3 2	4 2	
		2023年	9 6 7	4 0	
		2024年	1, 0 2 2	1 3 2	
		5カ年平均	1, 1 9 1	6 2	
	2025年見通し	1, 1 0 0	4 5		
	概要	愛知産中心の入荷。中旬頃からは秋系の品種も出荷が始まってくるが入荷量は少ないまま推移する見込み。価格も上位等級中心に高値の取引が見込まれる。			
小 ぎ く	実績	2020年	7 6 4	2 8	
		2021年	7 3 7	3 3	
		2022年	6 5 8	2 7	
		2023年	5 6 2	2 4	
		2024年	3 8 3	4 3	
		5カ年平均	6 2 1	3 0	
	2025年見通し	4 0 0	4 0		
	概要	愛知、沖縄からの入荷。中旬頃からは入荷量も安定してくる見込みだが、月を通して数量は少なくなると思われる。価格は安定する見込み。			
カー ネー シ ョ ン	実績	2020年	1, 1 4 7	3 1	
		2021年	1, 0 4 1	4 1	
		2022年	1, 0 0 0	4 2	
		2023年	9 3 8	4 0	
		2024年	1, 0 1 0	4 7	
		5カ年平均	1, 0 2 7	4 0	
	2025年見通し	1, 0 0 0	4 5		
	概要	長野産、愛知産、輸入の入荷。長野産はシーズンオフに向かい、色目が限定してくる。愛知産は例年に比べ、出荷は早かったものの、秋の冷え込みの影響もあってダラダラと出荷。暑さの影響が残る品種もちらほら見受けられる。輸入物は例年並みとなる予想。			
か す み そ う	実績	2020年	1 3 9	8 7	
		2021年	1 5 5	9 2	
		2022年	1 5 0	9 5	
		2023年	1 1 2	1 1 1	
		2024年	1 1 4	1 4 3	
		5カ年平均	1 3 4	1 0 3	
	2025年見通し	1 2 0	1 3 5		
	概要	和歌山産、高知産、熊本産を中心に入荷。福島産は前半で終了。10月中旬からの天候の影響によりやや少なめの入荷で、下旬から増えてくる。業務需要が活発な月であり、数量次第で単価は高くなる。			

単位：千本、円／本

品目	区分		入荷量	卸売価格	前年及び本年の入荷量・価格の動き
	実績等				
ゆり	実績	2020年	2 4 4	1 7 9	
		2021年	2 2 1	2 0 3	
		2022年	1 9 6	2 1 8	
		2023年	1 8 7	2 0 6	
		2024年	1 8 2	2 3 0	
	概要	5ヵ年平均	2 0 6	2 0 6	
		2025年見通し	1 8 0	2 2 0	
	概要	オリエンタルユリは高知産、宮崎産、埼玉産が中心。新潟産、北海道産は月末に向かって数量は減少。LA、鉄砲ユリも出荷は例年より少なく、下旬まで少ない予想。単価は中旬まで高値基調で動く見込み。			
洋らん	実績	2020年	3 5 0	9 7	
		2021年	3 2 2	1 1 9	
		2022年	2 7 8	1 1 8	
		2023年	2 8 8	1 2 4	
		2024年	2 9 4	1 3 1	
	概要	5ヵ年平均	3 0 6	1 1 7	
		2025年見通し	3 0 0	1 3 0	
	概要	オンシジウムは上位等級が減少し、下位等級が増える見込み。デンファレはアンナが増加。シンピジウムは国産が始まり、輸入は終了となる見込み。カトレアは気温の低下とともに出荷減。コチョウランは鹿児島産が11月いっぱい出荷減の見込み。輸入品はコスト上昇により昨年よりも要求単価がアップしている。			
ばら	実績	2020年	7 0 1	7 8	
		2021年	6 7 7	9 5	
		2022年	7 0 7	8 7	
		2023年	7 1 9	9 3	
		2024年	6 9 5	9 6	
	概要	5ヵ年平均	7 0 0	9 0	
		2025年見通し	7 0 0	9 5	
	概要	愛知産、岐阜産、三重産、輸入を中心に入荷。国産は夏の暑さのダメージも緩和されて、徐々に上位等級の出荷も増える。出荷量としては例年並となる予想。			
枝も	実績	2020年	1, 2 5 9	5 7	
		2021年	1, 4 3 2	6 2	
		2022年	1, 2 3 0	6 0	
		2023年	1, 1 5 7	6 2	
		2024年	1, 2 7 9	6 5	
	概要	5ヵ年平均	1, 2 7 1	6 1	
		2025年見通し	1, 2 5 0	6 5	
	概要	クリスマス向けの引き合いも始まる。今年はクジャクヒバの摘みが少なめ、ヒムロ杉は例年通り、ブルーアイスの引き合いは弱い。紅葉物も終わりに近づき、柳類や塗物などが中心になる。紅ヅルなどは年々価格が上がっており、使用頻度の減少が心配される。			

品目	区分		入荷量	卸売価格	前年及び本年の入荷量・価格の動き
	実績等				
ドラセナ類	実績	2020年	16,748	941	
		2021年	14,522	1,130	
		2022年	12,209	1,300	
		2023年	11,307	1,197	
		2024年	10,973	1,083	
	5ヵ年平均		13,157	1,103	
	2025年見通し		10,900	1,000	
概要	入荷量は前年並で例年より減少か。海外からの輸入原木の仕入れ減に伴い、生産量が減少。出荷は、ユッカ・マッサンの定番の出荷がメインになると思われる。サイズは4号～8号が中心で、大きいサイズは減少の見込み。 前年11月の主要県の入荷実績は、金額ベースのシェアで1位愛知（70.3%）、2位鹿児島（12.3%）、3位福岡（5.0%）であった。				
シヤコバサボテン	実績	2020年	32,266	539	
		2021年	24,868	583	
		2022年	24,947	563	
		2023年	22,694	469	
		2024年	22,025	467	
	5ヵ年平均		25,171	531	
	2025年見通し		20,000	500	
概要	入荷量は前年よりかなり減少か。出荷は5～6号中心の入荷見込みだが、4号以下は特に入荷量が減少すると思われる。入荷量の減少と単価帯が高いものの割合が増えるため平均単価は上昇する見込み。暑さの影響等により翌年以降の親株にも影響が出ており、現時点で減少の見込み。 前年11月の主要県の入荷実績は、金額ベースのシェアで1位埼玉（65.8%）、2位愛知（34.2%）であった。				
シクラメン	実績	2020年	791,136	302	
		2021年	794,945	309	
		2022年	672,730	322	
		2023年	670,882	308	
		2024年	576,499	323	
	5ヵ年平均		701,238	312	
	2025年見通し		560,000	321	
概要	入荷量は前年よりわずかに減少か。特に暑さの影響でガーデンシクラメン以外は上旬の入荷が少なくなると思われる。4号以上の出荷は中旬以降が中心で個人需要の荷動きとなりそう。贈答品の出番は下旬以降となるが年々需要も減少傾向で苦戦は必至の状況となる見込み。 前年11月の主要県の入荷実績は、金額ベースのシェアで1位愛知（27.8%）、2位群馬（20.1%）、3位岐阜（10.7%）であった。				

単位：鉢、円／鉢

品目	区分		入荷量	卸売価格	前年及び本年の入荷量・価格の動き
	実績等				
シンビジュウム	実績	2020年	40,986	2,268	数量 千鉢 単価 円/鉢 月
		2021年	50,173	1,917	
		2022年	35,955	2,127	
		2023年	37,876	2,101	
		2024年	27,136	2,018	
	5ヵ年平均	42,807	2,023		
	2025年見通し	22,000	2,000		
概要	入荷量は前年よりかなり減少か。開花の遅れと生産数量減少が要因。11月20日頃から出荷が増える見込み。アーチ仕立てと立のスタンダード仕立ての割合は前年並の予想。11月下旬から12月中旬の需要期には出荷活況となる見込み。 前年11月の主要県の入荷実績は、金額ベースのシェアで1位愛知（55.2%）、2位高知（9.3%）、3位徳島（8.4%）であった。				
カラコエ	実績	2020年	19,132	265	数量 千鉢 単価 円/鉢 月
		2021年	21,561	250	
		2022年	15,014	249	
		2023年	14,615	256	
		2024年	10,092	292	
	5ヵ年平均	16,864	255		
	2025年見通し	10,000	290		
概要	入荷量は各サイズで前年並か。入荷ペースは5号でやや遅れの見込み。4号以下の入荷は暑さの影響で遅れの分が加わり微増となる見込み。冬場アイテムへの切り替えの時期ということもあり相場の乱れが発生しやすい状況となる見込み。 前年11月の主要県の入荷実績は、金額ベースのシェアで1位埼玉（33.5%）、2位岐阜（31.2%）、3位茨城（11.9%）であった。				
パンジー	実績	2020年	900,558	54	数量 千鉢 単価 円/鉢 月
		2021年	972,835	59	
		2022年	786,696	63	
		2023年	755,883	74	
		2024年	582,767	87	
	5ヵ年平均	843,194	62		
	2025年見通し	580,000	86		
概要	入荷量は前年並か。近年の夏以降の暑さで販売開始の遅れから仕込みも遅らせている傾向のため、10月下旬から11月下旬までに出荷が集中する見込み。11月中旬以降は開花待ちや需要に対しての供給不足になる可能性があり、また生産者も限られてきている状況と思われる。 前年11月の主要県の入荷実績は、金額ベースのシェアで1位愛知（25.1%）、2位奈良（14.9%）、3位高知（13.1%）であった。				



いいともあいち運動って知ってる??

- 県内の消費者と生産者が今まで以上にいい友関係になる
- Eat more Aichi products (イート モア アイチ プロダクツ)

＝もっと愛知県産品を食べよう（利用しよう）

愛知県の農林水産業の振興や農山漁村の活性化を通じて県民全体の暮らしの向上を図るため、県民の方々に「愛知県農林水産業の応援団」になってもらい、消費者と生産者が一緒になって愛知県の農林水産業を支えているという「運動」です。

県民の方々に愛知県産農林水産物をもっと利用していただきたいという、「愛知県版地産地消の取組」でもあります。

あいち農産物生産流通レポート No.627
2025年11月発行
農業水産局農政部食育消費流通課
〒460-8501
名古屋市中区三の丸三丁目1番2号
電話 (052) 954-6434